

# PROFILE .....

## 安西 尚彦

獨協医科大学医学部薬理学講座



本年4月1日付けで獨協医科大学医学部薬理学講座の主任教授に就任致しました。

私は平成2年に千葉大学を卒業し4年間臨床医学に従事した後、平成6年大学院に入学し、福田康一郎教授（現名誉教授）の第二生理学教室に学内留学として派遣され、生理学に興味を持ちました。同教室助教授から北里大学教授として異動された河原克雅先生にお誘いを頂き、平成7年7月に北里大学医学部生理学の助手として赴任し、当時千葉大学医学部高次研におられた清野進先生（現神戸大学医学部生理学・糖尿病内科教授）と稲垣暢也先生（現京都大学糖尿病内科教授）、三木隆司先生（現千葉大学医学部生理学教授）から分子生物学実験を教わりながら北里大学にて腎尿細管のK<sup>+</sup>輸送の分子生物学的解析に従事しました。その後平成11年10月より Michel Lazdunski 教授が所長を務める南仏ニースのCNRS分子細胞薬理学研究所に留学し、酵母 two-hybrid (Y2H) 法による酸感受性イオンチャネル ASIC の結合タンパク質探索を行いました。その経験を買われ、平成13年8月からは遠藤仁教授（現名誉教授）の主催する杏林大学医学部薬理学に所属し、Y2H法を立ち上げ、トランスポーター結合タンパク質の同定を行いました。遠藤先生退任後2回教授が代わり、同じ所属で3人の教授のもとで働くという貴重な経験を得て、今回縁あって獨協医大薬理学への異動となりました。

歴史オタクを自認する私は、獨協医大への異動に当たり、自宅の三鷹に近い世田谷にあります松陰神社に参拝するとともに、日露戦争という国難を首相として乗り切った獨逸学協会学校（獨協学

園の前身)第2代校長、桂太郎先生の墓所に参り、就任のご報告をして参りました。この未曾有の国難の時期に日本の医療の柱となるべき医師の育成を預かる医学部教授の職を得たことで、私の使命は何かを常に意識せずにはられません。日本の国際的競争力低下と言われる中、今後必要なものは「勇気」と「連帯」であると考えます。私は今基礎医学分野では「日本版 FASEB」の創設が必須と考えております。日本の研究の未来を担うべき若手研究者の先細りが心配される中、各学会が別々に若手の囲い込みをやっても非効率的です。むしろ「基礎医学」を担う若手ということで、どの学会かに縛られず、自由に各分野を行き来出来る「若者視点」での体制作りが必要ではないでしょうか？それが「日本版 FASEB」と考えます。いろいろなものに関心を持つのが若手の特権であり、一つの分野に絞らない柔軟性が研究推進においても大事と考えます。そこで解剖、生理、生化、薬理、病理、免疫学会の各組織を保ちつつも同じ時期に同じ場所で開催することで、若者にとっては参加費用の大幅な軽減を可能とし、より密な交流と活性化も可能になると信じております。

若輩者ではございますが、医学の中心であるべき「生理学」の発展に、少しでもお役に立ちたいと切望しております。そのためには「基礎医学」の裾野をもっと広げるべきだと考えます。今後ともよろしくご指導・ご助力のほど、よろしくお願い申し上げます。

### 略歴

平成2年3月 千葉大学医学部卒業 第一内科・

医員

平成7年7月 北里大学医学部生理学・助手  
平成11年10月  
フランス国CNRS分子細胞薬理学研究所・留学  
平成13年8月 杏林大学医学部薬理学・助手（平

成18年・同講師, 平成20年・同  
准教授)  
平成23年4月 獨協医科大学医学部薬理学講座・  
主任教授